

古代デロス島聖域における祭壇と空間構造についての考察

——第2回日欧古代地中海コロキウム 出張報告

長尾美里

西洋史学 博士後期課程3年

2009年3月26日から29日まで東京大学で開かれた第2回日欧古代地中海コロキウム「古代地中海世界における社会規範と公共性」に、名古屋大学大学院文学研究科教育推進室からの助成を受けて報告者として参加した。本稿はその報告内容についての概要である。

今回の研究会の目的は主に次の3点であった；1) ポリスにおける規範意識発生過程の探求、2) ポリス公共圏の構造の解明、3) 古代地中海世界におけるギリシアの公共性の歴史的展開の後付け。この研究会には、日本から筆者を含めた報告者8名にコメンテーターが5名、海外（イギリス、アテネ、オランダ）から8名が報告者・コメンテーターとして参加した。今回、筆者は古代ギリシアの聖域の1つであるデロス島のアポロン聖域にみられるアルカイック時代からヘレニズム時代までの祭壇の配置から、聖域という公共の空間がどのように利用にされていたのかについて「Some perspectives from the altars in the Delian sanctuary of Apollo」というタイトルで報告をした。

1 はじめに——デロス島アポロン聖域と祭壇

デロス島は、エーゲ海の中でもキクラデス諸島が作る円の中央に位置する小島である。東西500m、南北1300mという細長いこの島の北西部には、アルテミスとアポロンのために造営された聖域が広がっている。島へのアクセスは現代では近隣のコノス島から出る小型フェリーに乗り、島の北西部の港から上陸するのが一般的である。この船着場の位置は海岸線の位置こそ変化しているものの、古代もほぼ同じであったと考えられており、聖域のプランも北西部の海岸線からのアクセスを考慮した作りとなっている。島内に残された様々な遺構や出土品から、前7世紀に作られた『ホメロス風アポロン讃歌』の中で歌われたように、デロス島が古くから人々の集う場所として機能してきたことがうかがわれる¹⁾。また、エーゲ海を中心に位置しているという地理的特長もあいまって、ギリシア

本土のみならず、小アジアからも人や物資が入る海上交易の結節点でもあった。そのためこの地に作られた聖域も長い歴史の中で、ローカルなものからより多くの人々が利用する国際的な特色をもった聖域へと発展していったのである。

このようなデロス島の聖域は、国際聖域として名を馳せたギリシア本土のオリンピアやデルフォイに並ぶ規模を有しているのだが、遺跡の詳細、とりわけ建物の同定に関しては他の国際聖域と比べると幾分困難な状況にあるといえる。例えばオリンピアの場合、紀元後2世紀の旅行家であるパウサニアスが、当時のエリス人が行っていた犠牲式の順序で聖域内に分布する祭壇について叙述しているように、聖域の内部でどのような活動が行われていたのかを古代の著作家が書き残していることが多い²⁾。またデルフォイの場合はパウサニアスの記述に加え、山の斜面に作られたことで出来上がったジグザグの道が、残されたテキストと見つかった遺構との照合をより容易にさせている。このような記述と実際に発見された遺構とを照らし合わせることで、当時の人々が聖域の中をどのように移動していたのか、遺跡の中の建造物やモニュメントの同定、各施設と儀式の関係について推測することが可能となるのである。

一方、デロス島の場合、ヘロドトスが聖域の様子について言及しているにもかかわらず、その記述が建物の同定に役立つ情報とはなっていない³⁾。考古資料とそれに関連する碑文資料からの推測には限界があり、聖域内で重要な建物であったと思われる大規模な建物に関する同定も、依然として研究者の間で意見が分かれたままであるのが現状である。しかし、デロス島が古代ギリシア史の中で果たした役割を検討する上で、島内の施設の発展を抜きに語ることは不可能であり、建物の同定に関する問題はデロス島の発展史を探る上でも重要であるだけでなく、この島と関わりをもっていた多くのギリシア諸都市の歴史にも繋がる問題である。

デロス島の調査を担当していたR. エティエンヌは、

島内に分布する祭壇が聖域のトポグラフィを考察する上で重要な要素になることを指摘している⁴⁾。デロス島内の建物に関して正確な同定が不可能である以上、祭壇のみが唯一その機能を明らかにすることが比較的容易な施設である。つまり、祭壇の周辺で当時の人々が何らかの儀式をおこなったであろうと推測することが可能といえよう。そして、古代ギリシアの儀式の中で重要な位置を占める祭壇に隣接する建物は、聖域内でもある程度重要な役割を担っていたであろうと、推測することも可能となる。

それに加え、デロス島はある特定の祭壇と、それにまつわる儀式で有名な場所であることが、古代の著作の中でも度々言及されてきたことも注目に値する。例えば、ヘレニズム時代の詩人カリマコス⁵⁾は、デロス島の聖域内に、アルテミスが捕らえたヤギの角を組んでアポロン自らが建てた祭壇があり、その周りで人々が集まりアポロンを祭っていると伝えている⁵⁾。また、プルタルコス⁶⁾は人々が手をつないで踊る「鶴のダンス」と呼ばれる踊りが、この祭壇の周辺でおこなわれていたと言及している⁶⁾。この、いわゆる「角の祭壇」だけでなく、エティエンヌによると現在確認されているもので41件もの祭壇がデロス島で見つかっている⁷⁾。祭祀の中心的な位置にある祭壇は遺跡の全体像を探る上でも重要な要素であるにもかかわらず、従来のデロス島の発掘報告は特定の建造物が中心となっていた。例えばデロス島の初期の段階に関する代表的な研究として1958年に公刊されたH. ギャレ・ドゥ・サンテールのものが挙げられるが、そこに掲載された前古典期の聖域の復元図は、後にエティエンヌが「建物が空間の中に浮いているようで、道や壁などでつながっていない」と表現したように、個々の建物との関係に関して考慮されていないものであった⁸⁾。そこで本報告では、聖域という公共の空間がどのように利用されたのか、その発展状況とその歴史的背景をより詳しく検討するために、従来の建物だけではなく聖域内の祭壇の分布状況との組み合わせから検討を試みた。

2 祭壇の分布状況

デロス島の中でこれまでに確認されている41件の祭壇のうち20件が復元可能なものである⁹⁾。ここでは、アポロンとアルテミスの聖域内に分布する祭壇に限定し、聖域内部での祭壇の分布状況と個々の周辺の建物との関係について検討できるような図を作成した。もちろん、個々の建物のクロノロジーについても意見が

わかれているため、本稿ではおよその年代や建物の呼称、同定は *Guide de Délos (4th ed.)* に従った¹⁰⁾。

デロス島の祭壇の分布に関しては、エティエンヌが1991年に発表した論考の中にすでに掲載されたものがあるが、聖域の発展の最終段階の図にすべての時代の祭壇を配したものであったため、ここでは、デロス島の発展に影響を与えたと思われる歴史的な出来事を基に、以下のような4つの段階に祭壇の設置時期を分け、各段階でどのような建物が作られたのかがわかる図の作成を試みた。

1. 前7世紀から前540年まで（第1回のデロス島の祓い前まで）
2. 前540年から前404年まで（ペロポネソス戦争の終わりごろまで）
3. 前404年から前314年まで（デロスの独立前まで）
4. 前314年から前116年まで（デロスの独立時期の間）

各段階でみられる祭壇の分布状況から、聖域という空間がどのように使用されたのか、また祭壇と同時代の建造物との間に関係があったのかを以下の章で検討する。

3 祭壇と建物との関係

最初の段階である前7世紀から前6世紀前半ころには、すでにアルテミスの聖域周辺に3つの祭壇が存在していたと考えられている（図1）。後の時代に作られた馬蹄形の建物（GD 39）が建てられる一帯からは、アルカイック時代以前にあたるミケーネ時代から使用されていた形跡が見つかっている¹¹⁾。この近辺に祭壇が出現したのがおそらく前8世紀ごろだという¹²⁾。GD 39が後の聖域の中心的な場所に位置すること、聖域内に作られる3つの神殿が個別の祭壇をもたないことなどから、この祭壇こそが、カリマコスやプルタルコスが言及した祭壇であるとする説が最近では有力となっている¹³⁾。次いで、前7世紀にはアルテミスの神殿の正面に位置するアルカイック時代の祭壇が造られた。また、ピンク色の大理石を用いたアルカイック時代の祭壇（アポロン・ゲネトールの祭壇？）が「角の祭壇」の裏側に設置されていたことを、アリストテレスが『デロス人の国制』で伝えていたと言われている¹⁴⁾。

第2段階になると、少なくとも新たに3つの祭壇GD 23A, B, Eが聖域の東部のエリアに造られた（図

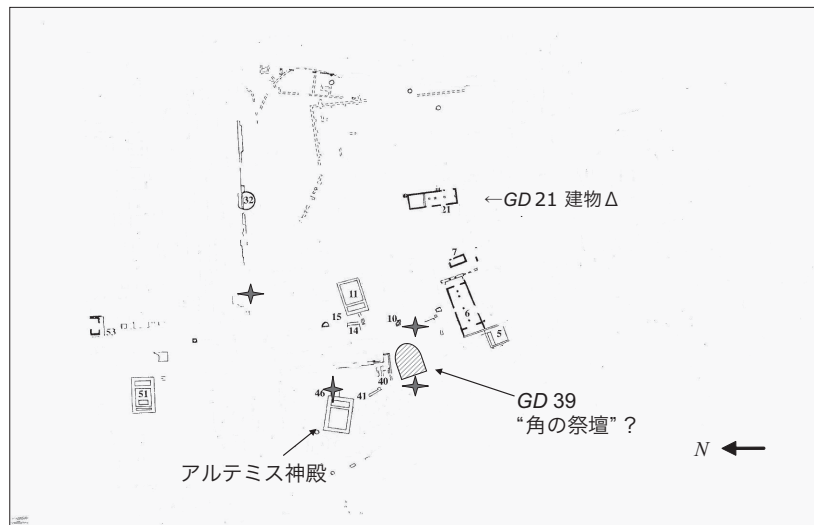


図1 前7世紀から前540年頃まで

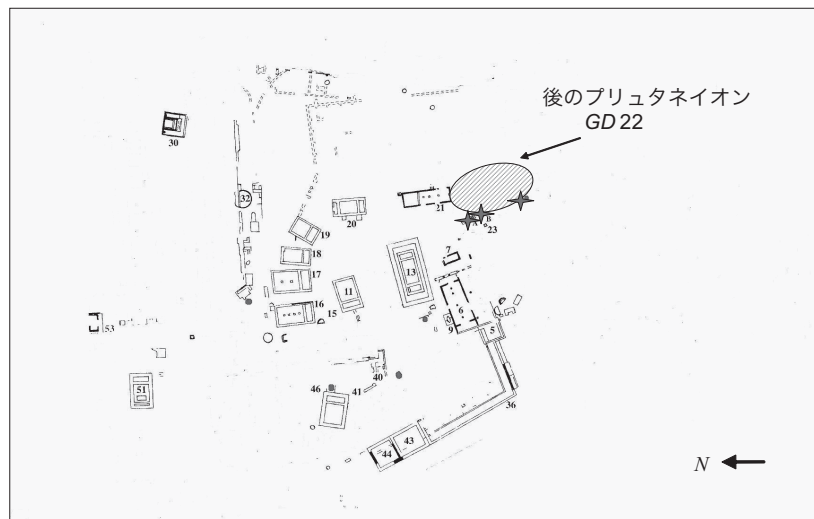


図2 前540年から前404年まで

2)。このエリアには後にプリュタネイオン (GD 22) が建造されている。エティエンヌは GD 23A の祭壇がおそらく市民の空間の痕跡を残す最初のものであると指摘し、アルテミス聖域に建てられた「コの字」型の祭壇と同じ時代の前6世紀の末ごろと提案した。同じ頃、GD 23B の祭壇も GD 23A の南側に建てられる。この祭壇はコの字型の上、三段の階段 (クレピス) が付けられたタイプであったとされる。次に、後のプリュタネイオンから南に15mほど離れたところに、GD 23E が建てられた。この祭壇も三段のクレピスをもつコの字型の祭壇として復元され、おそらく正面は北を向いていたと考えられている。設置年代については、前6世紀末から前5世紀初めとされ、おそらく、ゼウス・ポリウスとアテナ・ポリアスの祭壇と考えられている¹⁵⁾。アテナ・ポリアスへの奉納は、前6世紀末に

はデロスで行われていたことが奉納碑文 (ID 15) で裏付けられている。また、アテナ・ポリアスに捧げられたとされる柱が「プーレウテリオン／建物Δ」(GD 21) の北東の角に立てられていた¹⁶⁾。

第3段階に入ると新たに2つの祭壇が加えられる (図3)。1つは前5世紀ごろに後のプリュタネイオン (GD 22) が建てられる位置に造られたもので、この祭壇は竈の神であるヘスティアのものと同定されている¹⁷⁾。そしてもう1つ GD 23C は前5世紀の終わりごろに GD 23A の西側に建てられた。コの字型で周囲をトリグリフとメトープで囲まれ、両側に彫刻を施したペディメントをもつこの祭壇は、「ペロポネソス型」と呼ばれ、「この時代のキクラデス諸島におけるアテナイの政治的なモニュメント化の要素を見出すための重要な要素である祭壇」と指摘されている¹⁸⁾。アテ



図3 前404年から前314年まで

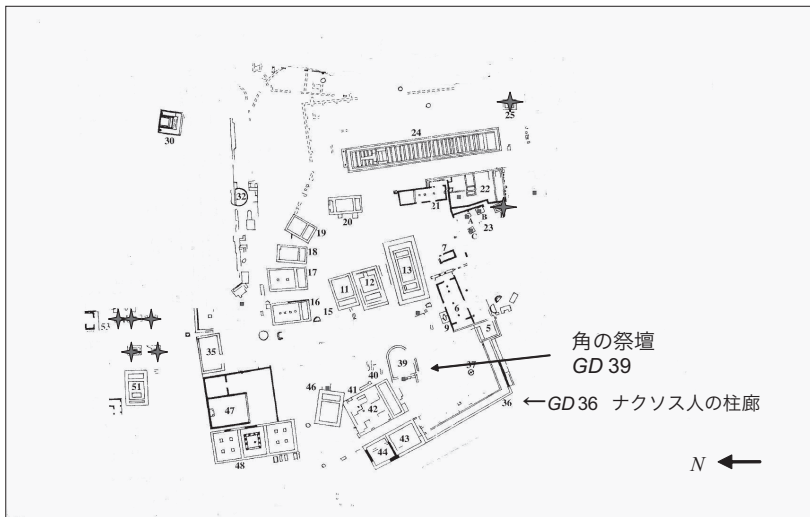


図4 前314年から前116年まで

ナ・パイオンとアポロンの名を刻んだ碑文を含むブロックがこの祭壇の中央に位置していたと推測されている¹⁹⁾。

第4段階にあたるデロス島独立期には、ヘレニズム時代の王たちがアポロン聖域内にこぞって列柱廊を建立し、聖域内の建造物の数が増加した(図4)。聖域内に祭壇は新たに2つ追加され、1つGD 23Dはプリュタネイオンの西側に建てられた。この祭壇も両側にペディメントをもったタイプのものとして復元され、前4世紀末から前3世紀初頭に設置されたと考えられている²⁰⁾。もう1つの祭壇GD 25は、聖域の東のエリアに建てられた「牡牛のモニュメント」(GD 24)と呼ばれる建物の背後に位置している。この祭壇の同定には様々な意見が出されているが、エティエンヌはゼウス・ソーテールとアテナ・ソーテリアの祭壇と同

定している²¹⁾。さらにアポロン聖域の外側にあたる北のエリアには、ドデカテリオンへ捧げられた祭壇が設けられた。

アルカイック時代から独立期にあたる前3世紀までのデロス島の祭壇と建造物の分布状況を概観すると、西エリアから徐々に東エリアに拡大していったことがわかる。そして、各エリアにおいて、祭壇と個々の建造物との関係からさらなる検討事項が浮かび上がってくる。ここでは主に1) 西エリアのモニュメントGD 39とナクソス人の建造物との関係と、2) 東エリアの祭壇とプリュタネイオン(GD 22)との関係の二点に焦点をあて検討を試みた。

4 GD 39=「角の祭壇」とナクソス人の建造物

西エリアではGD 39を中心にナクソス人が造営したとされる3つの建造物(GD 6, GD 9, GD 36)が、アポロン聖域の南西端を画定している。このレイアウトは西側の港からアポロン聖域につながる参拝者の動線にも影響を与えていたと考えられる。もし、個々の建造物が、聖域へのアクセスを意識した作りであるのならば、祭祀の中心となる祭壇との位置関係も十分視野に入れていたと考えられよう。もちろん、その建物の用途が何であったのかがわかれば、祭祀の空間や祭壇との位置関係もより理解しやすくなる。ナクソス人による建造物の中でも、聖域の南に位置する最古の施設「ナクソス人のオイコス」(GD 6)は、その使用目的と建造時期について長い間研究者の間で意見が分かれていた²²⁾。1つは、前7世紀にオイコスの前身となる建物が造営されたと主張する説。もう1つは、前6世紀になってから造営されたとする説である。従来「ナクソス人のオイコス」は、デロス島聖域で最初に主導権を握ったのがナクソス人であったことを示す証拠としてデロス島の発展史の中に位置づけられている²³⁾。しかしその機能についても、宴の場であったとするものから、最古のアポロン神殿であったとするものまで様々である。もし仮に、我々がGD 39をアポロン祭祀の中心施設である「角の祭壇」とみなすのならば、この「ナクソス人のオイコス」にまつわるこれらの問題に対し、次のような指摘をすることができる。

まず、オイコスの前身が存在したとする説の場合、前7世紀にはすでにオイコスからみて北西の位置であるアルテミス聖域は祭祀の場として機能していたはずである。しかしこの時期の“オイコス”は、アルテミスの施設に背を向けた形で入り口を設けられ、また西側の海岸線から迂回する形に建てられたことになる。この点についてさらなる説明が必要となろう。一方、前6世紀を最初のオイコスの建立時期とする説の場合は、根拠の1つであるクーロス像の土台の加工が別の土地で行われていた可能性も否定できない。ただ、入り口が当初から西向きであった点は、GD 39の前を通過する参拝者にとっても都合がよく、島内の南北に走る聖道(北部の港からライオンの像の並ぶテラスを通過し、アポロン聖域につながる通り)に沿うように造営された可能性も考えられる。

前6世紀の終わり頃までには、2段階目の記念門が建てられ、その西端部分に柱廊が付け加えられた。

「ナクソス人の柱廊」(GD 36)は、結果としてアポロン聖域の南西の境界線の役割を果たすことになる²⁴⁾。さらに聖域の南側に記念碑的な門であるプロピュロン(GD 5)の完成が、それまでの参拝者の動線に大きな影響を与えたことは想像に難くない。以前は、島の北部に位置するスカルダナ港からナクソス人のオイコスまでの南北の軸が、アポロン聖域への中心的な動線であったのに対し、記念門の存在によって人の出入りは聖域の西側の港からも可能となった。また西の港の利用が増えることで、同時に聖域の北西角、アルテミス聖域の西側の入り口も利用されるようになったと考えられる。エティエンヌは、西側の入り口に祭祀上の役割はないと指摘しているが²⁵⁾、西から聖域へ入った際の参拝者の視界に広がる風景——左手に「角の祭壇」を配し、右手に巨大なアポロン像が見下ろしている——を考慮すると、正門である記念門と同様、重要な入り口であったと考えられる。

GD 42とGD 39に意見が二分されている「角の祭壇」の同定と、ナクソス人のオイコスの建設時期に関する問題を検討する上で、アポロン祭祀の中心的な設備であるべき「角の祭壇」が聖域のどこに位置しているべきなのか、他の建物はその祭壇に対しどのように並んでいたのかを考察することは、これらの問題に対して何らかの解決の糸口を与えてくれるのではないだろうか。本稿ではナクソス人のオイコスの年代に関する問題を深く扱うことはしないが、仮にGD 39を「角の祭壇」とみなした場合、ナクソス人のオイコスの建設時期についても、当初から建物の入口が祭壇の位置する西側を向いて建てられた「前6世紀説」がより説得力のあるものと捉えることができる。

5 東エリアと祭壇 GD 23C, E

一方東エリアでは、プリュタネイオン(GD 22)が建てられる以前に、すでに複数の祭壇がこの一帯に建てられていた(図2)。西エリアの「角の祭壇」以外に、このエリアに祭壇が建てられたこと、そして、その後プリュタネイオンのような公共施設が建てられたことを考慮すると、祭壇分布図の第2段階の前半、すなわち前6世紀末ごろがアポロン聖域周辺エリアの「転換期」であったといえる。同じ時期に南エリアはナクソス人によってオイコスや柱廊で埋められていった。「ナクソス人の柱廊」(GD 36)によって港から聖域へのアクセスが制限されると同時に、プリュタネイオンが建設されたことで、アポロン聖域周辺と市民の

ための公的な空間がより明確に分離していったことになる。前6世紀から前3世紀初めまでの間にこの空間にアポロンやアルテミス以外の神々への祭壇が建造されたことは、その時代のデロス島における他のポリス、中でも聖域管理を行っていたアテナイとの関係を考慮して理解する必要がある。

例えば、前6世紀末に建造されたゼウス・ポリエウスとアテナ・ポリアスの祭壇 GD 23E の存在は、このエリアにアポロンとアルテミスとは別の守護神を祭ったことを意味している。もちろん、アテナへの奉納はアルカイック時代のデロス島ですでに存在していたが、アポロン聖域周辺の建築活動の一環として新たなアテナの祭壇を加えたことは注目に値する。この頃に、建物 (GD 21) が立てられアテナ・ポリアスに柱が捧げられたことから、アポロンとアルテミスの聖域に隣接するように、アテナの空間が拡大したことは明らかである。また、前5世紀後期にアテナ・パイオンとアポロンの祭壇 GD 23C が建造されたことも、当時のキクラデス諸島におけるアテナイのヘゲモニーや、アテナイによるデロス島聖域の管理と結び付けて考察することが可能であろう。

6 おわりに

デロス島聖域に限らず、古代ギリシアの聖域とは当時の社会を映し出す鏡である。多くの人々が集まる空間に建造された建造物・モニュメントは、そこに関わる人間やポリスに対して何らかのメッセージを発しながら存在していたはずである。祭壇という祭祀の中心的な施設を新たに設けることは、聖域の中において神殿と同様、強いメッセージを内包した行為であったと考えられる。

祭壇の分布状況から明らかなように、デロス島のアポロン聖域は前6世紀後半を境に東へと拡大していく。そして大きく2つのエリア、つまり、GD 39を中心とするエリアと、GD 22を中心とする東エリアにわけることができる。そしてこの2つのエリアを分断するように3つの神殿と5つの宝庫が並ぶ。前6世紀後半に、南側の記念門 (GD 5) と柱廊 (GD 36) が建造されることによって、聖域の西側の港から訪れる参拝者に対し、主に2本の動線が生まれた。1つは、記念門から聖域の中心地へと続くもので、もう1つは記念門の正面を通過し、プリュタネイオンの立つ聖域の東エリアへと続くものである。この2つのエリアは異なる時期に出現し、そしてその性格も異なっていたと考

えられる。西のエリア、とりわけアルテミスの神殿の周辺はミケーネ時代に遡る長い歴史をもつ宗教的なエリアである。一方東エリアは、早くてもアルカイック時代後期から出現し、アポロン、アルテミス以外の神々、とくにアテナと関係のある祭祀の場となる。さらに、プリュタネイオンやブルーウテリオンに代表される公共施設が建てられ、後の時代にデロスのアゴラも南側に増設される、より世俗的なエリアとなる。

聖域内部および周辺の土地の利用の変遷は、当時のデロス島とキクラデス諸島との関係やギリシア本土の諸ポリス、とりわけアテナイとの政治的な関係と共に考察されるべきである。今回の報告では、建造物自体に焦点をあてたため、今後は他の史料と照らし合わせながら、聖域の発展の歴史をたどる作業をより細かく行う予定である。

注

- 1) 『ホメロス風アポロン讃歌』(146-155)
- 2) Paus. (5.14.4)
- 3) ヘロドトスの記述と実際の遺跡との矛盾については、Roux, G. (1973) “Salles de banquets à Délos” *Études Déliennes*, BCH suppl. 1, pp. 275-282を参照。
- 4) Étienne, R. (1992) “Autels et sacrifices” in J. Bingen and A. Schachter (eds.), *Le sanctuaire grec*, Geneva 305.
- 5) アポロンが建てた角の祭壇については、Callimachos, *Hymn to Apollon*, 58-63. デロスの祭壇については、Callimachos, *Hymn to Delos*, 312-313, 316-317, 320-323.
- 6) 祭壇とケラトンの周囲で行われたダンスについては、Plutarchos, 『テセウス伝』21.2など。GD 39については、Bruneau, Ph. and Fraisse, Ph. (2002) *Le monument à abside et la question de l'autel de cornes*, Paris.
- 7) Étienne, R. (1991) “Espaces sacrificiels et autels déliens” in R. Étienne, M.-Th. Couilloud-Le Dinahet (eds.), *L'Espace sacrificiel dans les civilisations méditerranéennes de l'antiquité : actes du colloque tenu à la Maison de l'Orient, Lyon, 4-7 juin 1988*, Lyon : Bibliothèque Salomon-Reinach, Université Lumière-Lyon 2 ; Paris : Diffusion de Boccard, 1991, pp. 75-84 (plate IX), 78.
- 8) Gallet de Santerre, H. (1958) *Délos primitive et archaïque*, Paris. Étienne, R. (2002) “The development of the sanctuary of Delos: new perspectives” in M. Stamatopoulou and M. Yeroulanou (eds.), *Excavating classical culture, Recent archaeological discoveries in Greece*, (BAR International Series 1031), 285.
- 9) Étienne (1992) *op. cit.*, 78.
- 10) Bruneau, Ph. and Ducat, J. (2005) *Guide de Délos*, Paris.
- 11) Farnoux, A. (1990) “Recherches sur le dallage à l'Ouest du Bâtiment à Abside” *BCH* 114, 897.
- 12) エティエンヌは、この地での初期の祭壇はオリンピアのゼウスの祭壇と同じ堆積層が積み重なったタイプと主張している。
- 13) GD 39の考古学的な調査については、Bruneau, Ph. and Fraisse, Ph. (2002) *Le monument à abside et la question de l'autel de cornes*, Parisを参照。GD 39を角の祭壇を保護する建物として碑文の中に登場する Κερατόν と同一視することについて

- は, Courby, F. (1913) “L’autel de cornes à Délos” in *Mélanges Holleaux*, Paris, pp. 59–68, Bruneau, Ph. (1981) “Deliaca (IV)” *BCH* 105, pp. 79–106, Bruneau, Ph. (1995) “L’autel de cornes à Délos” *CRAI*, pp. 321–334を参照。一方, ΚερατωνをGD 42と同定するのは, Vallois, R. (1966) *L’architecture hellénique et hellénistique à Délos, Jusqu’à l’éviction des Déliens (166 Av. J.-C.)* (2nd ed.), Paris, pp. 30–31. Roux, G. (1979) “Le vrai temple d’Apollon à Délos” *BCH* 103, pp. 109–135などを参照。
- 14) アポロン・ゲネトールの祭壇がケラトンの背後にあることについては, デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(8.1.3)の中で引用されたアリストテレスの『デロス人の国制』の中で触れられている。Bruneau, Ph. (1970) *Recherches sur les cultes de Délos à l’époque hellénistique et à l’époque Impériale*, BEFAR 217, Paris, pp. 161–164.
- 15) Étienne, R. and Fraisse, Ph. (1988) “Restitutions architecturales” *BCH* 112, p. 752. Étienne (1989) “Autels à Délos : deux points de topographie” in R. Étienne, M.-Th., Le Dinahet, and M. Yon (eds.), *Architecture et poésie dans le monde grec, Hommage à George Roux*, Lyon : Maison de l’Orient ; Paris : Diffusion De Boccard, p. 45. Étienne, R. (1999) “L’autel en marbre rose à l’ouest du Prytanée” in N. Stampolidis (ed.), ΦΩΣ ΚΥΚΛΑΔΙΚΟΝ. *Mélanges N. Zafeiropoulou*, Athens, pp. 244–246. Étienne, R. and Braun, J.-P. (2007) “Autels de Délos et autels ioniens” *AA* 2007–1, pp. 17, 25–27. この祭壇の一部とされるブロック C1, D1とアンテス部分のブロックに, ゼウス・ポリエウス, アテナ・ポリアス, ゼウス・ソーテール, アテナ・ソーテイラを合同で管理する前2世紀末の神官ポンボステレスのリストが刻まれていることから同定される (*IG* XI 2607, 2608)。祭祀については Bruneau (1970) 233–236を参照。
- 16) GD 21の同定については, Vallois (1966) *op. cit.*, pp. 25, 119–121を参照。デロスでのアテナの祭祀については, Bruneau (1970) *op. cit.*, pp. 248–249を参照。
- 17) プリュタネイオンの建設時期については, Étienne, R. and Farnoux, A. (1988) “1. Le Prytanée, A. Sondages” *BCH* 112, pp. 746–752. ヘスティアの祭祀については, Bruneau (1970) *op. cit.*, pp. 442–444.
- 18) Étienne (2007) *op. cit.*, 12.
- 19) ID 47 I は, プリュタネイオンの西の壁の外側から原位置でみつかった。同じ大理石で作られたこの碑文の断片と思われるもの (ID 47 II) は, 聖域から少し離れた多柱式の建物 (GD 50) のそばでみつかった。
- 20) Étienne, R. and Fraisse, Ph. (1988) *op. cit.*, 752. Étienne (2007) *op. cit.*, pp. 17–20.
- 21) GD 25の同定と年代については, Étienne (1989) *op. cit.*, pp. 45–47. Bruneau (1970) *op. cit.*, pp. 233–238. Bruneau and Ducat (2005) *op. cit.*, pp. 193–194を参照。
- 22) ナクソス人のオイコスに関する最大の問題はその建設時期である。この地区を発掘した P. クールビンは, 東側に玄関が作られ, 部屋の中央に二列の列柱をもつ前7世紀の建物「前オイコス」が存在していたことを報告している。クールビンにとって, 前7世紀の「前オイコス」は, その他多くのギリシアの神殿でみられるように東側に入り口をもつという特徴をもっているため, 初期のアポロン神殿であるという結論を導くことは理にかなっていたようである。オイコスの東側にミケーネ時代の建物「神殿Γ (GD 7)」が存在していたことも, 東側に入り口の存在理由としては十分であったようだ。続く前6世紀に入ると, オイコスは建て直され, 入り口は西側に移動する。前575年頃には, オイコスの南西側に, 聖域への入り口となる最初の記念門であるプロピュロン (GD 5) が建造される。前570–560頃には, オイコス内に設置されていた排水システムが動かされ, 再び入り口は東に戻されるという変遷を想定したのである。Courbin, P. (1980) *L’Oikos des Naxiens*, EAD XXXIII, Parisを参照。また, オイコスの北側の壁に接するように立てられているナクソス人のクーロス像 (GD 9) も, 前7世紀の建物の位置が目安になって建てられたものとした。このクーロス像の建立時期は, 土台に刻まれた奉納碑文 (ID 4) のアルファベットから前6世紀初頭のものとして推定されていることから, 目安となる既存の建物は前6世紀初頭よりも以前であるとする, 「前オイコス」支持者にとっては都合のよい年代であった。ID 4については, Durrbach, F. (1921) *Choix d’inscriptions de Délos*, pp. 3–4. Plassart, A. (1950) *Inscriptions de Délos*, pp. 3–5を参照。
- これに対し, A. カルバクシスや G. グルーベンらは, クールビンが提唱した柱の跡を前7世紀の建物の跡とみなす解釈を否定し, これらの跡を前6世紀に柱を立てる際に使用した支えの跡であるとし, 最初のオイコスが建造されたのは前6世紀であると主張した。Kalpaxis, A. (1980) *Forschungen und Funde. Festschrift B. Neusch*, p. 237. Mertens, D. (1986) “P. Courbin, l’Oikos des Naxiens”, *Gnomon* 58, pp. 431–436. Kalpaxis, A. (1990) “Naxier-Oikos und andere Baugerüste” *AA*, pp. 149–153. Gruben, G. (1997) “Naxos und Delos” *JDAI* 112を参照。また, 前6世紀のオイコスが最初の建物であると主張する中で, クーロス像の台座の南側の面 (オイコスの北側の壁に接している部分) が他の面と同じように加工されていたことを根拠に, クーロス像建立時には前オイコスは存在していなかったとした。また, 全長9メートルはあったとされるクーロス像を, 既存の建物のそばに設置することも困難であると指摘し, クーロス像建立後の, 前6世紀第1四半世紀に最初のオイコスが建設されたと結論付けた。
- 23) 碑文上に「ナクソス人のオイコス」という名称が登場するのは前350年頃になってからである。ID 104–25 5, 104–26 B 11–24, 104–28 b B 5–25, 104–29 5–10.
- 24) 「ナクソス人のストア」は, 約前250年ごろのヒエロポイオの会計目録 (*IG*, XI.2 287 A 89–92行目)の中で記されている。cf. Courby, F. “Notes topographique et chronologiques sur le sanctuaire d’Apollon délien” *BCH* 45, pp. 238–239.
- 25) Étienne (2002) *op. cit.*, p. 291.